

中国のりんご事情

先進産地から



今年の7月～8月にかけて中国のりんご産地である先進産地2ヶ所を訪問視察する機会に恵まれたのでご紹介します。

中国のりんごはまだまだ発展しており、栽培面積も200万ha以上となり、生産量も4千万トンに達しております。生産技術も相当進化し、我々と同レベルの産地が急増してきているようです。10アールあたりの生産量は3～4トンとなり、生産額も20万円から多い生産者では40万円くらいの収入を得ております。まだりんごは収入が多く、魅力の大きい果樹産業となっているのが現状です。

そのうち今回は山東省栖霞市を紹介いたします。今までも20回以上訪問しており、今回は5年ぶりの訪問となります。

1. 産地の概要

栖霞市の総人口は66万人で、その約75%にあたる50万人がりんご農家です。まさしく「りんごの都」であると中国一の産地を自負しています。



中田 信雄

2. わい化栽培の推進

栖霞市では苗木の更新により、改植を積極的に推進しています。台木はこれまでのサンザシ台や実生台からM26台やM9T337台へ移行しています。生産された苗木は各りんご生産者へ無償で提供されており、将来はわい化栽培を栖霞市全面積の30～50%へ拡大する予定です。



「M9T337」の文字が確認できる

栖霞市では慣行栽培に加え、①減農薬栽培、②SOD栽培、③自然栽培という3つの栽培様式を取り入れています。これらの栽培様式は今はまだ小面積ですが、将来はどんどん拡大していくとことです。これらの栽培様式にかかるコストは慣行栽培と比べ2割ほど高いようですが、技術面での目途は立ったようです。

また一番重要となる水源については、貯水池を数多く作って万全を期しています。

3. 生産技術について

- ・面積…100万*ムー、生産量200万トン（13年前は60万ムー、生産量100万トン）
- ・りんご農家…10万戸（減少傾向）
- ・平均年齢…約50歳
20～30代の後継者も多い
- ・平均栽培面積…10ムー
- ・品種構成…「ふじ」が85%、ほか「国光」などが15%
- ・生産量…1ムーあたり3～4トン

*1ムー=約6.7アール

山東省栖霞市の産地概要



SOD栽培に使用される酵素

減農薬栽培	年間防除回数 4回（殺菌剤3回、殺虫剤1回） 害虫駆除に高圧電流を用いた透蛾燈を使用
SOD栽培	特別な酵素を使用 特別栽培として普及拡大中
自然栽培	農薬・肥料・除草剤を一切使用しない 生物・鉱物・微生物・酵素などの各資材を使用

将来拡大を目指す新たな栽培様式



害虫対策には透蛾燈が用いられている

4. 販売関係について
 収穫されたりんごは1キロあたり4〜6元の値が付けられています。反収では2万〜3万円となります。
 販売先についてはおよそ50%が合作社、40%が商社、残りがその他の業者という内訳になっています。

- ・ 1kgあたり単価…4〜6元
 (日本円にして60円〜90円)
- ・ 1反歩あたりの収穫高…2万〜3万円
 (日本円にして30万円〜50万円)
- ・ 主な販売先
 - *合作社…50%
 - 商社…40%
 - その他…10%

*合作社…日本の農協をモデルに作られた協同組合。

注) 1元 = 15円で計算

栖霞市産りんごの販売データ

5. 終わりに

5年ぶりに訪れた山東省栖霞市のりんご栽培は、まだまだ進化中でした。特にわい化栽培の急速な普及には驚かされました。M26やM9T337といった台木を採用し、将来は全地域へ拡大するという意気込みが生産指導陣から感じられました。現在、指導陣はさらなる知識や技術を求め、イタリア



「中国におけるりんご生産技術の発展からはまだまだ目を離すことが出来ない」と痛切に感じた今回の中国視察でした。

のチロル地方やニュージーランド、さらにはアメリカなどとも積極的に交流をしているようです。技術について特筆すべき点は害虫対策です。栖霞市では以前は交信攪乱剤を使用して防除効果を上げていましたが、現在では透蛾燈に切り替えて生産コスト低減を図り、同時に安全なりんごの生産に取り組んでいました。
 また、これからは有袋栽培から無袋栽培へと移行していくわけですが、現在栽培試験中で技術は相当高いレベルにまで達しているようです。近い将来にはこの産地から高品質なサンふじが生産されてくると思われます。